



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	罨に墮ちた彼女：連環画のなかの「性」
Author(s)	田村, 容子
Citation	連環画研究, 4, 118-138
Issue Date	2015-02-01
DOI	https://doi.org/10.14943/2115.98418
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98418
Type	departmental bulletin paper
File Information	renkanga_4_118-138.pdf



罨に墮ちた彼女——連環画のなかの「性」

田村 容子

文化大革命期(1966-1976年)、毛沢東夫人江青によって迫害された京劇女優趙燕俠^{ちやうえんきやう}の伝記に、次のようなエピソードが見える。1963年、突如趙燕俠を中南海に招いた江青は、食事の最中にだしぬけにこんな世間話を始めた。

「衛生紙を使うときはね、アイロンをかけなくてはだめ」。

衛生紙とは、トイレで使用するちり紙であり、当時は生理用品としても用いられた。目下の衛生紙は質がわるいので、係の者にアイロンをかけさせれば、衛生的だし柔らかくなる、というのが江青の話の内容である。このとき江青は、北京京劇院の看板女優であった趙燕俠に現代京劇『蘆蕩火種』(後に『沙家浜』に改題)を演じさせ、自身の功績とすべく画策していた。伝記は、江青が趙にかけた言葉を次のように伝える。

「『同業者は仇同士』ってよく言われるけど、私はね、同業者に会うとすごく親しみをを感じるの」。

江青は「女優」同士として趙燕俠に近づき、衛生紙の話題を持ち出すことで、女同士の気安さを演出しようとしたのかもしれない。

この会談の後日談、そして江青と趙燕俠の確執については、加藤徹『京劇』に詳しいのでそちらに譲りたい。ここで注目したいのは、真偽のほどはさておき、ファーストレディ江青であっても、60年代の中国ではそのような方法で月経の手当をしていたことが、80年代に流布されたという事実である。

田中ひかる『生理用品の社会史』によれば、日本においても、現在主流の使い捨てナプキンが普及する1960年代以前は、布、紙、綿を詰めるという原始的な方法から、ふんどしのような「丁字帯」やゴムびきの「月経帯」に脱脂綿を併用するという方法で、女性たちは月のものを処置していた。こうした女性の下半身、とくに「性」にまつわる事情というのは、なかなか大っぴらには語られない。情報の氾濫する現代ならいざ知らず、「性」を口にするのがはばかられた時代の乙女たちは、日々成熟していくおのが身体にどのように対処すればよいかわからず、困惑していたのではなかろうか。



「婦女衛生座談会」

ここに上海衛生出版社より刊行された、『婦女衛生座談会』という連環画がある。前書きによれば、この単行本には表題作を含む四つの短篇連環画が収録され、いずれも1956年の雑誌『婦嬰衛生』からの転載であるという。そのうち二篇は「月経衛生」と「一般個人衛生」を、残りの二篇は「麻疹」と「腸伝染病」の手当と予防を紹介しており、婦女と児童の閲覧に供する、とある。

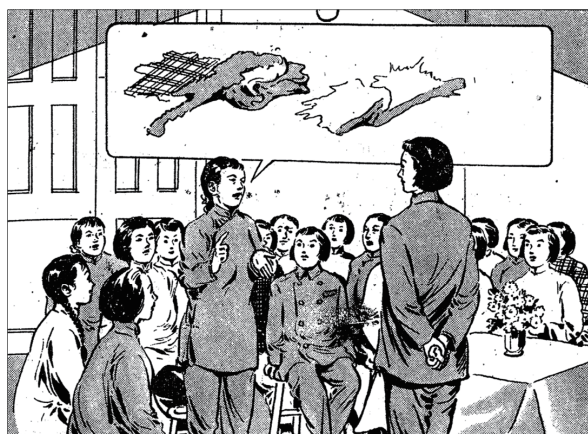
表紙には、カラフルな洋服、あるいはチャイナドレスを身にまとった女性たちが、テーブルの花とコップを囲んでおしゃべりに興じている様子が描かれる。〔左-表紙〕

その愉しげな雰囲気は、現代でいうところの「女子会」の様相を呈している。ちょっと表題作をのぞいてみたい。

ここは上海市の東側、新しく建てられた工場では何千人もの男女の工員が生産に就いています。この工場は衛生と保健管理に気を配っており、最近、保健室の李大姐^{ねえさん}によって「婦女衛生座談会」が開かれ、多くの女工が参加しました。

「今日は月経のときの衛生について討論しましょう。意見のある人は発表してください」と、李大姐が口火を切ると、王月芳^{おうげつほう}がこう言いました。

「月経のときに衛生に気をつけないと、婦人病にかかってしまうと思います。たとえば、うちの姉さんたら、ぼろ布や不潔な紙を当てていたんです……」〔右-4齣〕



4. 王月芳就說：“我覺得經期不重視衛生，就要引起各種婦科疾病。像我姊姊過去月經來潮時，使用破布和不干淨的紙來墊……”。



「……それで膣と子宮が炎症を起こし、おりものが増え、月経回数も異常に多く、ひどい貧血になってしまいました。今では顔色もわるく、元気もなくなり、何事にもやる気ありません。それもこれも、月経のときに衛生に気をつけなかったせいです」。(左-5齣)

王月芳の話を、周りの女性たちはわりあい平静な表情で聴いているが、戦慄の経験談といえよう。洗面器にひたされた脱脂綿と思しきもの、白

い布にハサミが、生理用品を自作せねばならなかった時代の女性の苦労をあらわしている。

その後も女工たちの「月経の怖い話あるある」見聞が交わされ、李大姐は次のようにまとめる。

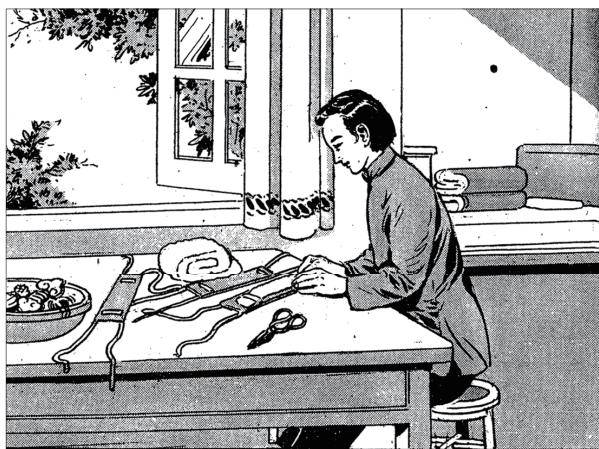
「本当に、むかしの女の人たちは封建思想の残した害毒のせいで、月経や婦人病について話すことを恥ずかしていました。でも月経は女子が思春期を迎えると起こる生理的な変化だから、人に言えないことではないのです」。

そして、月経期の正しい過ごし方について、以下のように啓蒙する。

「女子はおおよそ13歳から15歳にかけて初潮が始まり、おおよそ28日ごとに子宮から血が排出され、膣から流れ出ます。月経期間はふつう3日から5日ほどです」。(右-8齣)

「月経が来たら、衛生に気をつけねばなりません。まず清潔な月経帯を使いましょう。二、三枚用





9. “在月經來潮時，我們要注重衛生，首先要用干淨的月經帶，最好備有2—3條，以便隨時洗換。

意し、いつでも洗って交換できるようにしましょう」。「左-9齣」

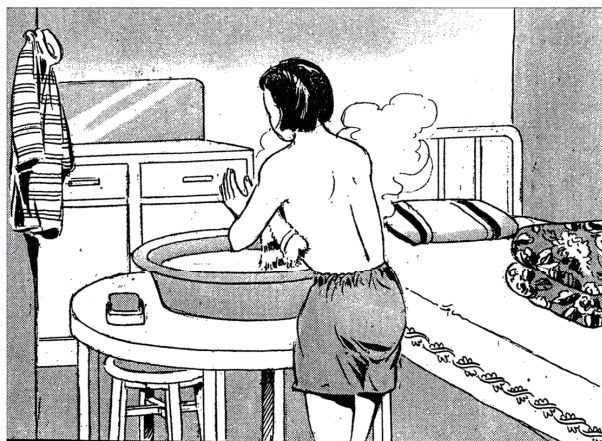
「同時に冷水浴はやめ、たらいに座って行水するのもやめましょう。温水で身体を拭けば、下半身を水につけることがなく、汚水が膣に入るのを防げます」。「右-10齣」

こうしたことは、現代では小学校高学年になれば教わる「常識」に属するのかもしれない。だが、「月経期の正しい過ごし方」というのは、意外とあやふやなもので

ある。筆者の通っていた愛知県の中学校では、1990年あたりまで、月経時にも水泳の授業に参加することが奨励されていた。水中では圧力で流血がとまる、と指導されたものだが、今となってはあれが正しかったのかはよくわからない。かように、思春期の乙女にとって、自身の発育についてはわからないことだらけなので、連環画の中の「李大姐」のお言葉に励まされた読者も多かったのではないだろうか。

また、こうした連環画は男性読者の目に触れることもあっただろうが、当時の男性がこの作品をどう読んだのかも興味深い。生理用品を手作りする女性、パンツ一丁で身体を拭く女性という画題は、なかなかほかの媒体では目にする事のできないものである。

連環画のつづきでは、月経時の禁忌として、過度な労働、酒・唐辛子・コーヒーなど刺激物の摂取、薄着やアイスを食べるなど身体を冷やす行為、マラソンや乗馬・遊泳など激しい運動、既婚女性の性行為が挙げられる。性行為をするのが「既婚女性」に限定されている点からは、当時の貞操観がうか



10. “同時不要洗冷水澡，也不要坐在洗澡盆里，要用溫水擦身，這樣下身就不会浸在水里，免得髒水流入陰道。

がえよう。これらの禁忌については、中国の伝統的な養生の考え方とも合致するところが多く、教えられるまでもなく実践していた人も多いと思われる。わざわざ啓蒙する連環画が編まれたということは、それだけ人びとの生活習慣が変わったということなのかもしれない。

明るい家族計画

1949年の中華人民共和国成立後、中国共産党は50年代から人口抑制の方針を打ち出し、60年代には「計画出産」に取り組む流れも起きた。しかし、毛沢東の労働力重視の意向と文化大革命の発動によってそれらは貫徹されず、中国で本格的に人口抑制政策がとられるのは、70年代後半からである。



以下に、中華人民共和国の計画出産政策に関わるプロパガンダポスターを眺めてみたい。ここでは思春期女子の視点でもって、そのポスターから何が読み取れるかについて考えてみよう。

まず、「どのように計画出産を実行するか」と題された一枚である。〔左〕

上段左は、太陽に向かって咲くヒマワリ、すなわち「毛主席の恩恵に照らされるよき人民」の象徴を背景に、人民公社の事務室から出てくる一対の男女を描く。彼らが手に持っているのは「結婚証書」と思しく、であれば今しがた結婚登記を終えた、新婚ほやほやの夫婦であろう。

しかし、説明文には「未婚の人は結婚年齢を遅らせるのがよいでしょう 男28歳 女24歳」と書かれており、つまるところ晩婚の奨励である。

上段右には、「避妊薬器具」と書かれた棚から何かのアンプルを取り出す薬局店員と、それらを指さす男女三名。説明文には、「既婚の人は科学的方法で避妊をすることができます」と書かれている。

避妊の奨励であることはわかるが、購買者三名の関係が不明である。夫婦とどちらか一方の父親という、親も公認の買い物なのだろうか。年若い薬局の店員から避妊薬を買うというのも勇気がいりそうだが、そうした購買者の心の負担を軽くするためにも、このようなポスターが必要とされたのだろう。

中央に置かれたガラスケースの上には、白いカプセル状の錠剤が見える。現在、日本では薬局で市販されていない、経口避妊薬というやつだろうか。

下段左は、手術室に向かう男性を描く。説明文には、「もう出産したくない人は、避妊手術をすることができます」とある。この男性が今からその手の手術を受けるのか、と思うのは早とちりであろう。図の右上の丸い囲みに、先ほど薬局で避妊薬を購入していた女性の後ろ姿が描かれている。おそらく手術室の中で手術を受けているのはこの女性、男性はそれを見舞いにきた彼女の夫か。よく見ると男性は、上段左の新婚男性と同一人物である。つまりこのポスターは、晩婚の奨励にしたがった夫婦のその後の顛末を描いているのだろう。女性は結婚後、手ぬぐいを姉さんかぶりにし、前掛けをつけるという姿に変身している。

下段右は、手術室の中の女性。トレードマークの手ぬぐいはかぶったままである。説明文には、「妊娠したがもう生みたくない人、あるいは少なく生みたい人は、人工流産することができます」と書かれている。このポスターが発信する、晩婚・避妊・中絶をすすめる一連のメッセージは非常に明快ではあるが、思春期の乙女には自分の身の上に何が起こるのか、よくわからないかもしれない。

もう一枚のポスターは、「避妊で注意すべきいくつかの基本的な要求」と題されている。

こちらにも手ぬぐいを姉さんかぶりにし、前掛けをした女性が登場する。どうやらこれは、おさげの「未婚女性」に対する「既婚女性（晩婚）」の扮装であるようだ。

説明文は、以下のように書かれている。〔右〕

- (一) 適切な避妊方法を選ばねばなりません
- (二) 用法は必ず正確に
- (三) あくまで使用を堅持し、^{ラッキー}僥倖を期待してはいけません
- (四) 夫婦双方の協力が必要です

これはまた、思春期女子には解読のむずかしいポスターである。

(二) の男性がひもといっている「ものの本」の題名、そして(三)の男性が引き出しから取り出している物体が何なのか、気になるものの、誰にも聞けやしないだろう。

(三) の男性の背景には、

「五好社員」と書かれた表彰状、そして机の上には小説『紅岩』が見える。「五好社員」とは、1958年に組織された、「工・農・商・学・兵」が一体化した「人民公社」の模範社員を意味する。ここでいう「五好」とは、政治思想、公共財産の愛護、労働態度、団結し紀律を守る、勤勉儉約に励む、の五項目にすぐれていることを指す。また『紅岩』は、羅^ら広^{こう}斌^{ひん}・楊^{よう}益^{えき}言^{げん}による1961年出版のベストセラーである。国民党の残虐な拷問に立ち向かう共産党員のヒロイン「江^ね姐^{えさん}」の物語は、演劇や映画、連環画にも改編され、一世を風靡した。これらは、「あくまで使用を堅持」する男性のイメージをあらわす、よき小道具として配置されているのである。

こうしたポスターは、中華人民共和国の人びとの「性」に対する意識がいかなるものであったのかを教えてくれる、貴重な資料である。その一方で、お上のお触れとい

避孕要注意的几个基本要求



(一) 要选择适当的避孕方法



(二) 必须用法正确



(三) 要坚持使用，不能存僥倖心理



(四) 要夫妻双方合作

うものが往々にしてそうであるように、このような啓蒙活動がくり返されたからといって、現実の人びとの生活習慣がすぐさま改められたとも限らないのだろう。

罠に堕ちた彼女

中華人民共和国期の連環画が、人民を導く「教科書」として作られたものである以上、そこに描かれる「性」は、上に見てきたような啓蒙を意図したものが中心となる。その中には、反面教師としての「性」を描く系統の作品もあり、むしろそちらのほうが、人びとの実態の一面を反映しているといえるかもしれない。

次に、月経を迎え大人になった女性が、その身体に性的「価値」があることに気づき、自ら「性」の交易の場へ足を踏み入れるさまを描く連環画を見てみよう。1955年8月に出版された『她上了圈套（罠に堕ちた彼女）』は、実話をもとにした物語である。少し長くなるが、前書きを読んでおきたい。

ふ ほうてい
傅宝娣は若き女工である。彼女は階級の自覚が足りなかったために、資産階級思想の侵食を受け、次第に腐敗、墮落していき、ついにゴロツキおうかいせい王開生の罠に堕ちてしまった。王開生はゴロツキ集団の首謀分子であり、卑劣な手段で彼女を強姦し、その後も弄び、騙しつづけ、彼女を家や工場に帰らせなかった。意志薄弱な傅宝娣は、ゴロツキ王開生とぐるになり、とうとうコソ泥および「地下舞女」（ヤミ営業の踊り子）に身を墮としてしまったのである。

宝娣の母親は娘の墮落のせいで心を痛め、食事ものどを通らず、夜も眠れず、何度も彼女を辛抱強く説得し、工場に連れ戻した。指導者と同志たちも再三にわたり彼女を助け、教育した。しかし資産階級思想に毒された傅宝娣は、資産階級の腐敗した生活をひたすらに追求し、指導者と同志たちの助けと教育を受けようとしなかった。最後には、人民政府は彼女を「労働教養所」に送り改造し、ふたたび真人間となる機会を与えた。そして、極悪非道のゴロツキ王開生は、ついには人民政府による法律の制裁を受け、死刑に処せられたのである。

本書は新聞報道と実地取材の材料にもとづき、それらを総合して編集、作画した。この物語に、われわれは資産階級思想の危険性とゴロツキ分子の罪惡の正体を、はっきりと見ることができる。これによって警戒心を高め、共産主義の道徳性によって不断に自己を武装し、社会主義社会を建設する偉大な事業のために努力せよ！

この「ゴロツキ」こと王開生は、なかなか著名なワルであつたらしい。『人民日報』1955年3月19日に、王開生、沈孝悌^{しんこうてい}ほか四名の「ゴロツキにして、窃盗常習犯、ペテン師、兵隊上がりのやくざ」どもが、長期にわたり「若者を毒し、婦女を犯し、ある者は少女を連続強姦し、児童を虐げ、徒党を組んで殴り合い、窃盗・詐欺をはたらき、共謀して強奪し、社会治安を乱し、革命秩序を破壊した」罪により死刑判決を受けた、と報道されている。

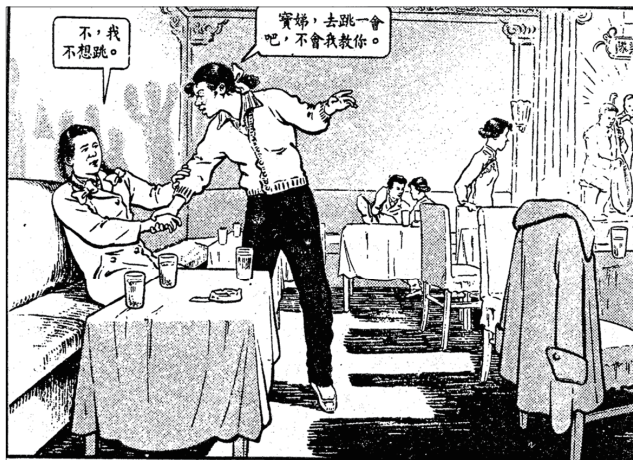
『上海青年志』によれば、1955年の『青年報』第541期には、傅宝娣の事例にもとづき「何が幸福か？」という討論が展開され、読者からの二千通近い投書が寄せられたという。同年6月には、新聞のルポルタージュが上海一帯で人気のうた入り音楽劇「越劇」に改編され、少壮越劇院によって上演された。公演は昼夜二ステージ、約二ヶ月間にわたって行われ、観客の熱烈な反響を巻き起こしたとの記録が、『上海越劇志』に見える。

連環画の出版も、おそらくは一連の啓蒙活動の一環として行われたのであろう。『她上了圈套』の作者林樹中^{りんしゅちゅう}（1926-）、絵師盧汶^{ろぶん}（1922-2010）と汪観清^{おうかんせい}（1931-）はいずれも著名な美術家であり、数多くの連環画を手がけている。全89コマにわたる本作は、1950年代の女工の日常、そこにひそむ誘惑と欲望を描ききった佳作であるといえるだろう。

表紙には、左手で顔を覆い、右手でハンカチをにぎりしめる少女の姿が描かれる。この絵に「罠に堕ちた彼女」のタイトルが添えられていれば、見る者は思わず、本を手にとってしまうのではないだろうか。〔右-表紙〕



物語は、1950年の春、17歳の女工傅宝娣が新たな職場に着任するところから始まる。ここでは、51年の秋、彼女が上海の横町で、近所の娘に誘われダンスホールに足を踏み入れた後の場面を見ていきたい。



(9) 同伴們都到舞池裏去跳舞了。只有寶娣坐在暗角裏發愣。她不僅是為了怕難為情，而且覺得自己的打扮實在太寒酸了。

この絵は、ダンスホール内部の様子である。画面右手に光り輝くホールと楽隊、そちらへ向かう断髪、パーマ頭の女性が描かれている。〔左-9齣〕

傅宝娣は連れの娘に踊りに行くよう促されるものの、片隅の座席で上着も脱がず、「踊りたくない」と答えている。説明文には、「彼女は、おどおどしてきまり悪いせいだけでなく、自分の格好がひどくみすぼらしく思えたのだ」とある。画面中央、椅子

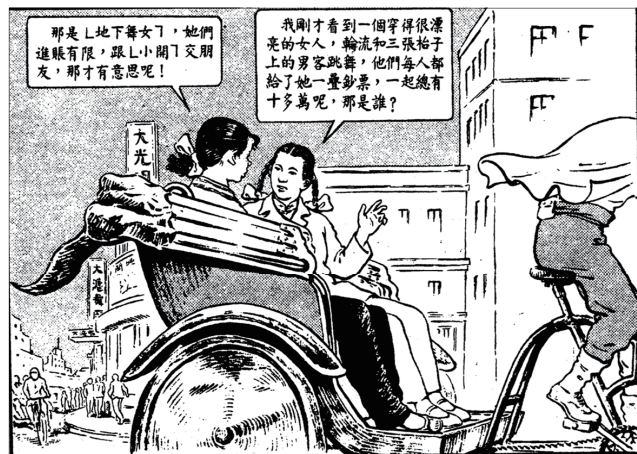
の下から伸びている影も、彼女がホールに足を踏み入れるのをためらう心理をあらわしているようだ。

初めてダンスホールを体験した傅宝娣は、あるものを見てしまう。帰り道、彼女は連れの娘にそのことを尋ねる。〔右-10齣〕

「さっきすごくきれいな格好をした女の人が、順番に三つのテーブルの男の客と踊ったら、それぞれが札束を彼女に渡すんだけど、全部で十万以上はあったみたい。あれは誰なの？」

「あれは『地下舞女』だよ、あの人たちの収入は大したことないよ。『若旦那』とつきあってごらん、そっちのほうが面白いから！」

ダンスホールで「若旦那」をつかまえ、結婚できれば一生食うに困らない、とそそのかされた傅宝娣は、その晩、こう思うのだった。



(10) 歸途中，寶娣把在舞廳裏看到的希奇事告訴女伴，女伴嗤的笑了一聲，隨即向她解釋起來。

(あたしの仕事のしんどいこと
ときたら！ あの人たちはただ踊
るだけで、面白おかしい上にお金
までもうかるなんて！ ……もし
誰か「若旦那」と出会うことがで
きたら、そのときは……)

その後の彼女の運命は、ほぼこ
のときに選択されたといえるだろ
う。〔右-12齣〕

初めは週末だけだったダンスホ
ール通いが、ついには毎日となり、
職場の会議で批判されても、傅宝
娣は反省しなかった。1952年の秋、彼女はとうとう念願の「若旦那」王開生に会う。
以下、傅宝娣がいかにして王の罠に堕ちたのかを見ていきたい。



(12) 寶娣這晚上怎麼也睡不着，女伴的話儘在她腦海裏盤旋。她想：我做工多辛苦！人家只要跳跳舞，又好玩，錢又賺得多！……如果遇到一個「小開」，那就……

ダンスが終わって時刻は夜11時半、王開生は傅宝娣を夜食に誘い、一杯また一杯と



傅小姐，舞廳裏壞人多得很，像你這樣漂亮的姑娘，交朋友可千萬要小心哪！

(21) 在一家酒樓的角落裏坐了下來，王開生很闊氣地喊了滿桌的酒菜點心，不懷好意地斟酒給她喝，斟了一杯又一杯；一面還裝作非常關心地勸她。

彼女に酒を飲ませ、こうささやく。

「ねえ傅さん、ダンスホールにはワルがたくさんいるから、君みたいなきれいな子は、気をつけてつきあわないといけないよ！」〔左-21齣〕

そういう王開生は下がり眉、出っ歯気味の口元で、髪はてかてかになでつけられ、手元のタバコからは煙があがっている。

これらすべてが連環画において、読者に「よからぬ輩」

を示すコードとして機能している。だが、連環画世界の中にいる傅宝娣は、目の前のごちそうに夢中で、そのことに気づいていない。



王開生は貯金の話を持ち出して傅宝娣の気を引き、彼女が心を動かしたのを見ると、すかさず詰め寄って愛を語る。

「ねえ傅さん、ぼくは最初に出会ったときから、君のこと心から愛してしまったんだ。もし結婚してくれたら、食べるもの着るものに困らないし、快適に若奥様の暮らしをすればいいんだよ」。(左-23齣)

リボンをいじる傅宝娣の反応は、彼女が恥ずかしがっている

ことをあらわしている。しかし、テーブル一杯に並べられた料理は、すでにあらかた食べ尽くされ、鶏の骨と思しき物体が、小皿の横に置かれている。中国において、食べ終えた骨をテーブルに置くことはべつにマナー違反ではないが、残骸となった鶏の骨は、彼女がもう後戻りできないこと、そしてこれから彼女の身の上に起こることを予感させる描写となっている。

夜も更け、帰るすべのなくなった傅宝娣は、王開生の「姉さんの家」に連れて行かれる。しかしそこは空き部屋で、王開生が扉の鍵を閉めたとき、彼女の心に疑惑の念がわき起こる。

「お姉さんは？」「姉さんは香港に行ったよ、だから部屋は空いているんだ。さあ、どうぞ横になって休んで」。(右-27齣)

傅宝娣が手をかけているのは大きな鏡台であり、その奥にはベッドが見える。隙間に置かれた痰壺の周辺に、靴下、スリッパ、食べ物の殻やごみくずなどが散乱している。鏡台、机、王開生の足もとから広がる影は、





窮地に追い詰められる傅宝娣を、より一層おびやかしているようである。

次頁の説明文は、次のように語る。〔左-28齣〕

「ここは王開生の部屋だったのだ。ここで、彼はたびたび卑劣な方法で女工や女学生を辱め、彼のゴロツキ一味と盗みや強奪の算段をし、盗品を山分けしていた。その夜、傅宝娣は暴漢の辱めを受けた。王開生は彼女を職場に戻さず、さらに弄ぶべく、

偽りの結婚の約束をした」。

これが連環画に描かれた、望ましくない「事後」の場面である。二人の間では、次のような会話が交わされている。

「こんなことになっちゃって、あたしを職場にも行かせてくれないし、いつ結婚してくれるの?」「もちろんするよ、必ずする、もうすぐしよう……もうすぐね……」

乱れた布団、ベッドの上に落ちたりボン、裸足の足をさらけ出す男。こうした描写が、ここで「尋常ならざる事態」が発生したことを示している。しかし、これより後、傅宝娣にとって唯一の心のよりどころとなるのは、この夜の「結婚」の約束なのだ。

彼女は何度か家や職場に戻ろうとするが、王開生に結婚の話を持ちかけられると、彼の言いなりになってしまう。

連環画はここで、十一歳から見習い工として働かねばならなかった傅宝娣の生い立ちを、母親の回想によって描く。音信不通となった彼女を、母親や同僚は必死に探し、一度は工場に戻った傅宝娣。だが、ふたたび働き始めた彼女は、ふとした瞬間に王開生との一夜を、また彼が結婚の約束をしてくれたことを思い出しては、ぼんやりとしてしまうのだ。

そんな彼女のもとに、一本の電話がかかってくる。説明文は次のように述べる。

「電話をかけてきたのは、またしても王開生であった。彼は言葉巧みに、夜に『結婚』のことを相談しようと彼女を誘った。すると彼女の頭の中はもうろうとして、ま



(48) 打電話來的又是王開生，他花言巧語的約她晚上去商量「結婚」的事情。於是她腦子裏昏昏沉沉地儘又想着「結婚」，什麼競賽、計劃、次布都顧不到了。

たもや『結婚』で一杯になり、生産競争や、計画や、欠陥品のことなどどうでもよくなってしまった。〔左-48齣〕

たった一本の電話が、傳宝娣の足を王開生の「魔窟」に向かわせてしまう。あるいは読者は、彼女のこの行動を、あんな目に遭わされたのになぜ、といぶかしく思うかもしれない。しかし、貧しい家計を支える19歳の傳宝娣にとって、また当時の貞操観からしても、一度肉体関係を結

んだ「若旦那」との結婚が、自身の最良の選択肢だと思えたとしても、無理からぬことではなかろうか。

電話を受ける傳宝娣の表情や、画面を二分する斜めの空間の端がまくれあがっている描写からは、彼女がこの電話に戸惑いながらも、女工の生活から別世界へと連れ出してくれる男に、心がからめとられていく様子を読み取れるように思う。

この後、王開生の「結婚」の約束に騙されつづけた彼女は、ついには王とぐるになり、かつての自分のような少女に酒を飲ませ、王開生とその仲間の沈某に、生け贄として差し出すことまで行っている。〔右-66齣〕

この時点で、傳宝娣は髪を断髪にしてパーマをかけている。首元には花柄のスカーフを巻き、傍目にはもはや、ゴロツキ王開生とお似合いの女性に見える。

また、王開生の仲間の沈某とは、先の『人民日報』



(66) 在王開生的威逼下，寶娣心一橫就答應下來。那個姓仇的女學生被他們灌醉後，遭到了王開生和姓沈的輪姦，在這一樁罪行裏，寶娣做了幫兇。



(64) 王開生再三的逼着寶娣，要她幫着灌醉那個姓仇的女學生，以達到他們卑鄙無恥的目的。寶娣被逼得忍不住了，憤憤地責問了他一句。

の報道に登場する「沈孝悌」に違いない。

ここにいたるまでの、傳宝娣の心の葛藤を、連環画は以下のように活写する。

傳宝娣は、18歳の女学生に酒を飲ませて彼らの卑劣な目的を達成する手伝いを頼まれるが、一度はきっぱりと拒絶する。〔左-64齣〕

この絵で、王開生は「うまくいったら沈のやつに、君に新しい服をつくらせるから」

と約束しているが、傳宝娣は心を動かしてはいない。

だが、次頁で、「ふん、君はぼくと結婚したくないんだね、わかったよ、ご自由に！」と、王に結婚という「伝家の宝刀」を持ち出されると、とたんに動揺した表情を見せる。〔右-65齣〕

すなわち、傳宝娣が一步また一步と墮落の道を歩んでしまったのは、王開生の騙る物質的な財力に惹かれたというよりも、むしろ彼の約束する「結婚」に、心身ともに束縛されてしまったためと考えられよう。二人の背後に広がる影は、その力関係を強調して描いている。

この一連のコマでは、ゴロツキ王開生の表情の描写も味わい深いものがある。

そんな彼の「ダメ男」ぶりが際立つのが、傳宝娣が王に捨てられる終盤の一コマである。

傳宝娣を上海に残し、「本妻と離婚してくる」と偽っ



(65) 寶娣氣得不理他，轉身要走。王開生見她不答應，猛地沉下了臉色，冷笑了一聲，又搬出他唯一的「法寶」來威脅她。



て田舎に逃げた王開生。二、三ヶ月が過ぎた頃、とあるダンスホールの入り口で、傅宝娣は王に再会する。

駆け寄った傅宝娣は彼に冷たくあしらわれ、結婚の約束は次のように反故にされる。

〔左-83齣〕

「王開生は眼をしばたたかせ、口笛をピュウピュウ吹くと、のんびりとタバコに火をつけ、一口煙を吐くと、ようやく作り笑いをしながら言った。『ぼくかい？ ぼくのこと

は三年待ってからにしてくれよ』。宝娣はこれを聞いて、怒りのあまり気が遠くなりそうだった」。

まさしく絵に描いたような「ゴロツキ」ぶりを発揮する王開生の末路は、新聞紙面が直接連環画の画面に引用され、この物語が「事実」であることを読者に強く印象づける。〔右-87齣〕

この絵では、傅宝娣の妹が、おそらくは文盲である母親のために、王開生が死刑になったという報道の内容を知らせている。母親のほうは、政府と共産党の裁きに感謝の言葉を述べている。

なお、この新聞記事は『人民日報』のものとは異なり、本社所在地欄に「上海（11）漢口路三〇九號」とあることから、『解放日報』であるようだ。



1953年冬、傅宝娣は「労働教養所」に送られた。ここは軽犯罪者を労働に従事させ、思想教育を行う施設である。ある日、母親と妹が傅宝娣を訪ねると、彼女は決意をこう述べるのだった。

「母さん、あたしはかつて間違っていました。……今後出所したら、工場で勤めだしたときのように、一生懸命働いて、もう一度真人間になります！」〔右-89齣〕



物語の中では三年の月日が流れ、20歳にしては若々しさのない傅宝娣の表情が、彼女の嘗めた辛酸を物語っている。姉を見上げる妹の表情にも笑顔はない。紅いネッカチーフを巻いた「よいこ」である妹は、この姉に何度も期待を裏切られているのである。連環画全体の最後のコマであるにもかかわらず、決して大団円とはいえないこの妹の表情が、作品に独特の余韻を与えている。

ふたたび思春期の乙女の視点で、この連環画を眺めてみよう。『她上了圈套』は、1950年代の女工の「性」を描く貴重な作品である。本誌第2号、第3号の拙稿でも紹介したように、女工もの連環画のヒロインは、ふつう職場で集団生活を送っており、交際相手も同じ職場の同志、余暇の時間も職場の「倶楽部」や中庭で過ごすといったように描かれる。しかしこの作品を読んでわかるのは、上海の女工は余暇にダンスホールにも通えば、そこで交際相手を探すこともあったという事実である。

ダンスホールがいかなる場所で、どのようにして遊ぶか。男性から饗応を受けた場合、その代償として何が求められるのか。こうした手順まで細かく描かれており、つまりこの作品は、一種の「男女交際」にまつわる情報誌としても読めるのである。

都会のダンスホール、深夜のデート、夜食、酒、そして裕福な男性との（あくまでも結婚を前提とした）交際。まさに傅宝娣がそれらに惹かれたように、ここには思春期女子にとって、興味関心の対象となりうるものが並んでいる。そして、自身の身体が持つ性的「価値」は、それらと交換可能であるということを、この連環画から読み取ってしまう読者もいたのではないだろうか。

傳宝娣は騙されたが、自分ならもっといい相手と出会えるかもしれない。本来の啓蒙の意図とはうらはらに、この連環画は、そうした思春期女子の欲望を刺激するものとして読まれていたような気もする。そして、第二、第三の傳宝娣も現実にはいたことを考えると、この連環画に描かれる、「結婚」を餌とした男性の誘惑に抗えない傳宝娣の姿は、一部の読者には共感を持って受けとめられていたのかもしれない。

罠に落ちた女工たち

傳宝娣のように悪漢の罠に落ちる女工というのは、1950年代前半の連環画世界において、しばしば描かれる画題であったようである。管見の限り、こうした「性」描写を含む連環画はいずれも単行本であり、雑誌の形態をとる『連環画報』には見あたらない。

1951年5月初版の『肅清特務好生産（^{スパイ}特務を肅清し、よく生産しよう）』は、特務の罪業と末路を描く五篇の連環画を収録するが、うち二篇に女工を手込めにする場面が登場する。巻頭の「特務・漢奸・悪霸陳小毛的罪行（特務・売国奴・悪党陳小毛の罪状）」（労働出版社編審部編、羅盤画）は、上海で英国資本の製糸工場を営む陳小毛^{ちんしょうもう}の悪事を暴く。この連環画によれば、陳は帝国主義者の走狗であり、日本軍に協力する売国奴であり、日本が投降すると国民党の特務のボスに賄賂を贈るという、筋金入りの日和見主義者である。

特務にして悪党と称される陳小毛の罪は、ゴロツキ王開生よりもさらに重く、『人民日報』にも数回にわたり取り上げられている。1951年4月15日、「百人以上の女工を強姦、二千人以上の工員の賃金をピンハネ」したことにより逮捕されたとの第一報が掲載された後、4月29日には公開裁判が行われている。報道によれば、陳に強姦された女工が涙ながらに告発すると、群衆は「陳小毛を銃殺せよ！ 娘たちのために復讐せよ！」と叫んだという。翌日、陳は群衆の喝采の中、銃殺された。

では、その罪状を見てみよう。連環画の説明文には、こう書かれている。〔右-19齣〕



19. 他看了一個女工，抓住點小錯處，威脅她要停生意，最後叫到他家裏談談。

「彼はある女工に目をつけると、ちょっとした過ちをあげつらい、クビにすると彼女を脅し、ついには話があると家に呼びつけた」。

絵は「総管処」、すなわち陳小毛の執務室を描く。時代は中華民国期であるため、女工も彼も伝統的な中国服を着ている。女工はパーマをかけた髪を後ろで結っており、おさげにするほど若くはない、おそらく既婚女性であることが示されている。

「女工が彼の家の中に入ると、扉の外から鍵がかけられ、彼女は陳に強姦されてしまったのである」。〔右-20齣〕

ここでは、『她上了圈套』では描かれなかった「尋常ならざる事態」が、まさに進行中である。

陳小毛はうつろな眼で、ズボンの腰紐を露出させておそいかかってくる。女工の乱れた髪、ひきちぎられた服の胸元、そして扉に手をかけるものの、外から鍵がかかっているため開けられない描写は、悪夢のようである。

よく見るとこの部屋は、入り口の隣に大きな鏡台、その奥にベッドという家具の配置が、王開生の部屋とよく似ている。こちらのベッドは彫刻つきの柱、蚊帳の一部と思しき布とともに描かれ、王開生のものより高級そうである。



20. 到了他家裏，門被反鎖了，這個女工就被他姦污了。



21. 陳小毛常常威脅、強迫女工跟他去開旅館。被他姦污的女工有一百多人。

「陳小毛は、しばしば女工を脅し、彼と旅館に行くことを強要していた。陳に強姦された女工は百人を超える」。〔左-21齣〕

ここでは、また別の女工が陳小毛の罠に堕ち、望ましくない「事後」の場面が描かれる。

この部屋は連れ込み宿の一室であろうか、壁には「旅客注意」の張り紙が見える。ボタンの部分が全開になったチャイナドレスを着

た女工が、机に突っ伏し、靴のベルトもきちんとはめていない。対して陳小毛のほうはゆっくりと身だしなみを整えている最中で、上着のボタンをとめている。ベッドの隣にはやはり大きな鏡台があり、陳の後ろ姿を映し出している。



32. 人民政府公安局，在他準備逃跑前把他捉住了。

陳小毛は皮肉にも、女工を手込めにした自らの寝室で、逃亡の準備をしていたところをお縄となった。陳の右隣にいるのは、その妻である。〔左-32齣〕

陳小毛の処刑は、『人民日報』の報道に見たように、公開裁判の形式で行われた。〔左下-34齣〕

跪いているのは、右から「特務売国奴悪党」の陳小毛、「特務共謀者」の妻、そして「特務売国奴」

の息子である。画面の右側で拳をかかげているのが、彼らを糾弾する群衆であろう。

処刑のその日、陳小毛の工場の工員たちは銅鑼をたたき、爆竹を鳴らし、年長の女工も参加して民謡を歌い踊り、喜びを分かち合った。〔右下-35齣〕

「人民政府は見る目がある、よくぞ殺してくれた！ これで善人が頭を上げて平和な道を歩き、安心して平和なご飯が食べられる！」と、人びとは祝賀したのであった。



34. 四月卅日，人民政府接受人民的正義要求，在滬東各廠七多工人前面，槍斃了特務漢奸惡霸陳小毛，同時也槍斃了他的舊兒子陳磊，和他的幫兇老婆張金弟。



35. 槍斃陳小毛的那天，密豐廠的工人敲鑼鼓、放鞭炮，老女工也扭起秧歌來，互相道喜。大家都說：「人民政府有眼睛，殺得準！以後好人就能抬頭走太平路，安心吃太平飯了！」

本稿で取り上げた「性」を扱う連環画、とりわけ反面教師としての「性」を描く連環画は、読者にとって、中華民国期に流行した「黒幕」と呼ばれる実録ものや暴露小説にも似た、のぞき見の興味をともなうものであっただろう。

一方で、こうした連環画による啓蒙は、他人の「性」への関心を喚起し、その興味を正当化し、時には集団による監視へと変貌させる働きもあったのではないかと考えられる。

「特務・漢奸・悪霸陳小毛的罪行」の末尾においては、そうした連環画世界の外側にある「のぞき見」の視線が、連環画世界の中で群衆のものとなり、力を持つ様子が描かれる。群衆の視線が悪を糾弾する役割を果たし、女工たちが歌い踊る結末は、読者の溜飲を下げ、また思春期の乙女には安心感を与えるものであるといえるだろう。

だが、公開の処刑に喝采する人びとの興奮は、他人の「性」をのぞき見る欲望とどこかつながっているように感じられ、おそろしくもある。

思えば、『毘に堕ちた彼女』の傅宝娣が、家も職場も飛び出してダンスホールへと吸い寄せられたのは、親や同志たちのこうした「正しい」監視の眼から逃れるためでもあったのかもしれない。

【参考文献】

- 張釗・殷波『燕舞梨園——趙燕俠芸術生涯』、中国戲劇出版社、1986年
加藤徹『京劇——「政治の国」の俳優群像』、中央公論新社、2001年
田中ひかる『生理用品の社会史——タブーから一大ビジネスへ——』、ミネルヴァ書房、2013年
羅士敏編・胡振祥画『婦女衛生座談会』、上海衛生出版社、1956年12月
関西中国女性史研究会編『中国女性史入門——女たちの今と昔』（増補改訂版）、人文書院、2014年
横山宏「新中国における標語」、『早稲田商学』、第190号、1966年11月
林樹中編文、盧汶・汪観清絵図『她上了圈套』、美術読物出版社、1955年8月
「上海市人民法院判处一批盜匪流氓分子」、『人民日報』、1955年3月19日
『上海青年志』、上海社会科学院出版社、2002年
『上海越劇志』、中国戲劇出版社、1997年
田村容子「〈婚活〉する乙女たち——新「婚姻法」時代の連環画」、『連環画研究』第2号、2013年3月
田村容子「栄誉と秘密——「女工連環画」にみる内面の描写」、『連環画研究』第3号、2014年3月
労働出版社編審部等編写、羅盤・顧炳鑫等絵図『肅清特務好生産』、労働出版社、1951年5月
「鞏固人民民主專政、保障生産建設！ 広州槍決一批反革命首惡 上海逮捕一批潜伏工廠的特務和惡霸」、『人民日報』、1951年4月15日
「讓広大人民認清反革命分子罪惡 上海市集會公審反革命首惡」、『人民日報』、1951年5月5日
「上海槍決一批反革命首惡 千万市民到場觀看鼓掌称快歡声雷動」、『人民日報』、1951年5月5日

【図版（ポスター）】

- 「怎樣实行計劃生育」、出版年・作者不詳
「避孕要注意的幾個基本要求」、出版年・作者不詳

* 本研究は、科研費 25284065 の助成を受けたものです。

* 本稿執筆にあたり、武田雅哉氏に一部の資料をご提供いただきました。お礼申し上げます。